



For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

宮澤正典著

『増補 ユダヤ人論考』

（新泉社
三三四頁 二、五〇〇円）
B6版

歴史史料を読むことは、大学で歴史を講ずる者の仕事なのだが、その史料の内容は当然のことながら様々だ。とりわけひとつの思想なり、物の見方を語る史料のなかには、容易に自分との一体感を感じて没入できるものもあれば、嫌悪感をいかんともしがたいものもある。本書の巻末一二〇ページがあてられた日本におけるユダヤ人論議文献目録（さらにその追録が、宮沢氏の別著『日本人のユダヤ・イスラエル認識』一九八〇年、昭和堂刊Ⅱの巻末に七〇ペー

ジにわたって収められている）のうち、少なくとも戦前において書かれたものの大多数は、それを読むことが、今日の市民感覚からすれば一定の忍耐を必要とする、いささかの苦痛を伴う作業のはずだ。宮沢氏のいうように、日本におけるユダヤ人論議は、ある種のいかがわしき、うさんくささ、キワ物的なものを漂わせているが故に。この種のまとまった研究の開拓者である宮沢氏は、まとまった史料集もないままに、『猶太研究』をはじめ『亜細亜時報』『八光』『興亜資料月報』『拓植文化』『東亜連盟』『国民道』などといった、おそらくほこりにまみれた古雑誌や、きわ物的単行本として古書店に一括並べられている書物を渉猟せねばならなかったはずだ。

歴史家は、現在という高みに立って史料に接しているという、その優越的地位に対して常に謙虚であらねばならぬ、このことは常識的ではあるがなかなか守りたい。温厚にして謙虚な宮沢氏にはじめて、この取り扱にくいテーマを科学的分析のマネ板にのせえた。現実のユダヤ人問題をかかえない日本において、何故に一大文書

館を造りうるほどの量の論議が、主人公ぬきになされてきたのか、これを「一つの精神史的な問題」として、近代日本の世界認識の虚偽意識を照らす鏡に転化させる作業をなしとげられたわけである。

現代という高みに立っていることへの謙虚さがこの作業を成功させたものだ。が同時にユダヤ・イスラエル問題はすぐれて今日の国際政治の問題でもある。今日のイスラエル・アラブ間の諸問題の論争についての宮沢氏のトーンは不用意に走り読むと、両者に対するクールな行司役であるような印象を受ける。これは誤解にすぎない。増補版に寄せた「はじめに」のなかでの、旧版への批判者に対するポレミックな姿勢は、ふだんの宮沢氏を知る人のすべてがうける、物やわらかな紳士という印象との齟齬を感じるかもしれない。宮沢はどこに立っているのだ、という投げかけ易い批判に氏は答えている。

「現今のイスラエル・アラブ紛争をめぐる諸問題に、……どちらかに組して、すべての責任を他方に負わせるほど気楽な立場はあるまい。ユダヤ人問題は、往々二元化

してそれぞれ極限にまでいきつきやすかった。」

半世紀以上の日本での論議を見てきた宮沢氏の冷静さであり、自負である。

田中真人（大学人文科学研究所助教授）

店村 新次著

『ロジエ・マルタン・デュ・ガ

ール研究』

（三修社）
（六八八頁 一五、〇〇〇円）
（A5版）

一人の作者の内奥の生を隈なく照らし出すことは、およそ至難の業、それだけにまた研究者の夢でもある。生みだされた作品世界はそれだけで自立して、私たちの想像力を刺激するに余りある多彩な要素と結構に充ちみちているのに、これを現出せしめた当の人間の姿は、芝居の黒子然とくすんだ背景に慎しくも退いている。『チボー家の人々』の作者のように、同時代のジッドやブルーストと比べて奇矯な性癖や逸話に乏しく一見起伏のない生活に終始する尋常な個性が相手なら、その困難はまた格別のはずである。ところがそれに真向から挑ん

だ本書は、綿密な資料考証と周到な関係対象考察とをもって、マルタン・デュ・ガールの等身大の実像を、作家の人と作品との有機的連関のなかに見事に浮かび上らせた。この意味では、同じく今世紀の大作家の全体像を描き出したG・D・ペインターの『ブルースト——伝記』やR・エルマンの『ジェイムズ・ジョイス』（本邦未紹介）に優に匹敵する大仕事といえよう。

本文六四八頁、註・書誌・索引を含めて六八八頁に及ぶこの大著は、著者の手写を経て始めて陽の目をみる門外不出の文献や著者自らの発見になる新資料を網羅し、緒言では研究史概略と文献解題を兼ねるなど、世界でも初めての同作家研究の集大成として、今後、研究者心携の基礎文献となるだろうが、それだけに改めて仏語版の刊行を期待しておきたい。

が、本書の真価は、研究者向きの考証を超えたところにある。淡淡と流れていくかにみえる生活の背後に、息詰る内奥のドラマが展開されていく様を、著者は一貫して見据えているのだ。トルストイを師表と仰ぐためか、常に壮大なプランとなって現れ

る一種の創作上のボヴァリスム（誇大妄想）。歴史を先取りした筋書が、作者の時事感覚の鈍さゆえに絶えず修正を迫られるという苦渋。資料蒐集の完璧主義から来る重圧。加えて思想上性格上の不一致ゆえに妻という存在が潜勢的に生みだす作品への抑圧的干渉。これらが形成途にある作品をたえず自己崩壊の危険に曝すという葛藤劇を、作家の内部の人間は生きざるを得ない。危機を常に取り超えさせるのは、進行する作品そのものの内からの芸術的要請なのだ。いわば内なる芸術家の良心がボヴァリー流の破滅から自己を救済するこの不断のドラマは感動的だ。ある新鋭作家が本書を「研究書という枠をおのずから越えて、一個の芸術家小説となっている」と評した由縁であろう。

この文学的営為エウレチカの生理とでもいうべきものに、著者は精神分析、特にユンクの理論を応用した諸仮説をもって迫るが、この解析は説得的である。そのクライマックスは二八章。「みずからの存在の意義を問い直し、みずからの心の全体性と、より高次の統合性を求めて、その無意識のうちに潜む

「自己」の声に耳を藉そうとする、特権の瞬間への旅」として捉えられた作家のローマ滞在の章は、大業を果していよいよ死に臨まんとする芸術家の諦念と静謐を余すところなく描き切って、こよなく美しい。評者はマンの『ヴェニスに死す』、プルーストの『失われた時を求めて』のヴェネツィアの章に対するのと同質の深い静かな感動を味わった。著者の店村教授とその「芸術家小説」の主人公との、いわば二重の研鑽がそれぞれに貯えてきた巨大なエネルギーが、いよいよ融合し、いまや誰の眼にも透明な一つの生涯、一つの書物となって凝固結晶することによる浄化といおうか。

功績はまさに著者自身の文学に帰する。

山路龍天（大学文学部教授）

北村日出夫・中野収編

『日本のテレビ文化』

（有斐閣 二九〇頁 一、四〇〇円）

本書はテレビの誕生から、テレビが先行するマスメディアを駆逐しそうになった時期を経て、他のマスメディアと共存、併存

するようになった現代に到るまでの比較的短期の歴史の変遷を、受入れ側の反応と対照させながら——つまり、テレビはその誕生当時、映画に似た広がり方をしたが、日本の経済発展と共に個人又は家族という単位でテレビと対峙するようになるという現象を観察しながら——受入れ側がテレビによって得たものと失ったものを克明に記録、観察している。本書の六名の執筆者の中には、『テレビ化』を社会的に観察する立場の筆者だけではなく、テレビを情報・娯楽メディアとして活用する側に立つ筆者の二つの視点が含まれているが、研究の照準は共通して主にテレビを生活の中に受入れた側に合されている。更に、テレビの家庭での位置づけに関しては、日本人の生活空間（茶の間）に入り込み、準家族的的地位を獲得したものの、としての共通の認識がなされている。この共通認識は各筆者が、テレビが人々に与える思考・言語・価値体系上の影響の分析から抽出されたものであると思われる。各章を通して、テレビという新メディアをめぐってなされた、ハードウェアを作り売る側、ソフトウェアを作り

売る側、それらを買うユーザーという三つ巴の相剋の結果生れた『文化』の実体を把握しようという意気込みが感じられる。多分、この意気込みは、各筆者がテレビの誕生・発展を直接目撃するか、あるいはそれに関ったという実感から生れたものなのであろう。

本書は、テレビをしばしば一般的に見なされるように、社会的凶器として否定的に捕えていない。むしろ、テレビが創造した大衆文化を肯定的に見ている。しかし、テレビがもたらしたものが全て好ましいものであるはずがない。事実、皮肉なことに、本書の主な研究対象であり、テレビ文化の担い手であるはずの視聴者の実体は（視聴者という言葉が表わしているように）、ハードウェア（テレビ受信器）以外は、番組を買っているという意識、つまり、情報も娯楽も商品であるという意識が極めて稀薄なものである。これはとりもなおさずテレビを茶の間の家族として受け入れた結果であると思われる。

最後に、本書と本書の各章末に掲げられている書誌は現代マスメディア論のプライ

マリーおよびセカンダリーストとして役立つものと思われる。

中村春次（大学経済学部助教授）

金丸輝男著

『ヨーロッパ議会—

超国家的権限と選挙制度—』

（成文堂 A5版）
（三五六頁 三、三〇〇円）

「一九七九年六月七日及び一〇日、歴史上かつてない試みが地上の一角において実施された。ヨーロッパ議会の議員をEC加盟諸国民の手で直接選出する選挙がそれであった。」（本書、一三三頁より）ヨーロッパ議会は、ヨーロッパ諸国の上に立つ超国家的機構である、ヨーロッパ共同体（EC）の議会である。その議員が、構成諸国家の国家機関によって間接的に選出されるのではなく、構成諸国民によって直接選ばれることになったのは、議会の超国家的性格を實質的に示すことになり、理想の実現に向けての、大きな前進であった。

ヨーロッパの国際統合は、まず経済的レベルから始ったが故に、経済学者や私法學

者によるEC研究が先行していたが、この期にあたり国際政治学者として、早くからECに取り組んで来た、金丸輝男教授による、ヨーロッパ議会に関する本格的な研究書をもつことができたのは、大変喜ばしい限りである。

本書は、大きく分けると、「議会の制度」と「議会直接選挙制度」の二部に分けられる。第一部は、ヨーロッパ議会の簡明な概観ではじまり、ヨーロッパ議会の権限と、その権限行使の実態が描写される。第二部は、直接選挙への歴史、共同体直接選挙法、九か国の直接選挙制度、投票権と立候補権が手ぎわよく概説されている。最後に、第一回直接選挙の結果を通して、ヨーロッパ議会の政党別得票率と議席数のひずみを、選挙制度面から検討している。

今日のヨーロッパ議会の権限と構成は、未だに理想からほど遠く、超国家性の拡大への理念的側面と、国家的レベルからの多くの制約の存在、議員自身の所属国家からの完全独立の困難さなどの現実的側面との相克と妥協の歴史の結果である。著者自身は、本書を「制度的分析」と性格つけてい

るが、議会の権限の「実態」や、第一回直接選挙の結果の分析を始め多くの面で、ECの「政治」に切り込んでおり、それが、本書を単なる制度史を越える政治分析としている。

著者の現状分析はクールである。にもかかわらず、その底に、国際統合の理想に共感し、それに向っての一步前進に喜び、一步後退に歎く著者の情念が、一貫して流れているのに読者は直ちに気付き、心を動かされるに違いない。

三宅一郎（大学法学部教授）

内田勝敏・清水貞俊著

『EC経済をみる眼』

（有斐閣 新書版）
（二七六頁 七三〇円）

ECは、地域的経済統合の代表的事例として第二次大戦後の資本主義世界体制のなかで枢要の位置を占め、その動向は世界経済のうえに巨大な影響を与えている。近時は貿易摩擦問題の深刻化にもなっており、日本とも重大なかかわりをもっている。これまでECに関する研究文献は内外ともに相

当な蓄積があるが、その多くは特定の分野を対象とするもので、全貌を簡潔にまとめた書物は意外に少ないように思われる。内田・清水両教授の筆に成る本書は「ECについて成立から統合の現状までを深く分析し、その行方を展望しつつ、日本・EC貿易摩擦の問題を明らかにしたもの」(「はしがき」iiページ)で、本文二四四ページのほかに参考文献、年表、EC問題基礎用語解説などの資料三二ページが付けられている。

本書の特徴は、ECの全体像を初学者にもわかり易く平易に概説した点にある。しかも単なる啓蒙書にとどまらず、相当高度な水準の内容や諸問題の経済学的分析を含み、研究書としての性格をもそなえているといえよう。とりあげられている主な項目を列挙すると、世界経済のなかでのECの役割とその発展過程、貿易とくに関税同盟の効果の分析、農業政策、エネルギー政策、産業政策と競争政策、通貨統合、財政問題、南北問題とくにロメ協定の意義、ECと日本との関係などである。それぞれの分野について、EC成立以後の展開過程が

あとづけられ、現状分析のうえに将来への展望が示唆されている。とくに力点がおかれている日本との貿易摩擦問題については、貿易不均衡をもたらした原因が追求され、日本はECと水平貿易のパートナーになる必要性が説かれ、そのためには日本企業の産業協力をも含めた産業調整が問題打開のカギであることが強調されている。

本書についてあえて感想を述べさせてもらおうと、統合体としてのECの根本的な性格規定がやや不十分であると思われる。ECがグローバルなアメリカ体制と対立するリージョナルな統合運動として本質的にはブロックの性格をもつのか、あるいはグローバリズムと両立する過渡的な組織であるのかという点である。さらにECの対外関係について、ロメ協定を中心として発展途上国との関係が説かれているが、社会主義圏との関係をも含めたもっと多面的な検討が望まれる。本書を軸とした研究の一段の進展が期待されるのである。

藤村幸雄 (大学経済学部教授)

清水睦夫著

『スラヴ民族史の研究』

(山川出版社 A5版)
四五八頁 五、二〇〇円

「世界史」とは何か。この問いは、三十年にわたるロシア・東欧の古代・中世史探求の成果をまとめられた清水氏の出発点である。

これまでに描かれた世界史像は、「世界史」といいながら、実はヨーロッパ史、とりわけ西ヨーロッパ史に偏っていた。それは近代以後西ヨーロッパが世界をリードしたことで、ランケ以来ドイツを中心に近代歴史学が発達したこと等の反映であり、そのような世界史像自体が近代という時代の産物なのである。わが国でも西ヨーロッパ偏重の世界史像の克服が語られて久しいが、本書はその数少ない、具体的な成果の一つである。また、わが国におけるロシア史研究の中心は近・現代、とくに革命史にあった。従って東ヨーロッパ(ビザンティンとスラヴ世界)の古代・中世——その間ヨーロッパ史は西ヨーロッパではなく、東ヨーロッパを軸として動いていた——の研究と

いう点でも、本書は貴重である。

本書は四章から成っている。第一章「東欧スラヴ世界の黎明」、第二章「古代ルーシの成立と発展」、第三章「スラヴ族の社会、国家、信仰」、第四章「学史的回顧」である。明快な問題提起、要を得た学説の整理・紹介、簡潔な叙述は、高度な内容を盛り込んだ学術書を知的関心をかきたてる、親しみやすいものになっている。

本書を読む時我々は、著者が研究を始め、続けてこられた時代を想い起そう。わが国における「西洋史」の中でも未開拓の分野に取り組んだことからくる障害、各節の註に挙げられている史料を入手するさいの困難は、今日の比ではなかったはずだ。また、著者がソ連史学の研究成果を批判的に撰取しつつ研究を進める時に、歴史と政治とのかわわりは重い問題であったろう。本書の「結び」で著者が、「ソ連社会の閉鎖性」を認めるとともに、「ソ連の現実に対応する傾向的・皮相的、かつ感情的な日本人の貧素な認識」に言及し、「東欧スラヴ史についての多面的な理解・把握とそれがための各部門提携の協力的な研究の推進と

展開を切望」される意味を、我々はかみしめたい。

「世界史とは何か」という問いは、歴史的なものの方・考え方が、我々が生きていく上で必要な一つの態度・方法であるかぎり、決して「歴史の専門家」にとつてのみ意味のある課題ではない。本書は広く歴史に関心を抱く多くの人々に、味わいつつ読まれるべきである。

松原広志（龍谷大学助教授）

岡 満男著

『この百年の女たち』

（新潮社 B五版）
（二二二頁 七八〇円）

いちど読みだしたら、とてもやめられないし、読み終るとスシリと自分に重みがかかってくる書である。記者生活二十五年、同志社大学での研究生活十年という岡教授にしてできることである。新聞・雑誌、自伝・伝記、歴史などの豊富な資料を使って目次に見るように、明治からの女の苦節、運動、世相習俗、歴史の推移などが、根底にある問題を浮かびあがらせながら実にな

まなましい事実として語られている。いや著者は事実をして語らせているといつてよい。これはハートと思想とがひとつになっている人でなければできないことである。

本書は二部に分けられる。第一部「ジャーナリズムをになう」は、新聞人第一号岸田俊子、雑誌創刊者羽仁もと子・福田英子女記者の誕生・新聞家庭面のはじまり、女の情熱の結集「青鞥」の波紋が内容である。第二部「ジャーナリズムがえがく」は混浴禁止に見る習俗抑圧の問題、スカートの下に腰巻―洋装ことはじめ、肉食のすずめ―西洋料理の普及、社会規範の重圧―恋愛悲劇素描、背徳視にさらされた産児制限運動、同権の土台をきざく―政治参加の成果を内容としている。結語は「社会にむけて目を向け」である。

第一部では、断片的知識はあるものの、自分をかけて生き、自分を通した女性の生涯が語られており、感動というより男にしてみても発奮させられる。彼らの苦節を通して日本近代化過程における男中心社会と女性が自由に生きる可能性の閉ざされた状況が浮き彫りにされている。第二部はジャーナ

リズムに見る習俗、世相、社会規範、運動を通して女性の問題状況の推移を述べている。

女はかよわい存在ではない。女のたくましさに甘え、囷にのり、「権柄」にすぎりついていたのが、男中心社会の男たちであった。社会的には、女のエネルギーの閉塞であった。さらに不幸なことに、日本近代化の大半の時期が戦争と富国強兵につきやされ、男中心社会の存在を助長し増幅し増幅した。男同様に自由のびやかに生きる可能性をもつようになったのは、戦後のことである。戦後にも問題が残されている。ジャーナリズム世界については、世の中が男と女でいともなまれている以上、男の「目」とともに女の「目」も必要とする述べる。しかし、日本の状況におくれている。

問題の底辺は、日本人社会に今も根強い性差別意識の存在にすべて帰着する。女が自立をめざして自由に生きる道はけわしい、なぜこの意識が旧態をのりこえられないか。これは日本人の生活態度、他者見合いの生活態度に帰する。女性の意識の變化

以上に、他者見合いがうみ出すムードの支配がある。女の歴史を逆行させないため、日々くらしの中で主体的に考え、行動する生活をやしなう必要がある。それには社会に「目」を大きく開く努力をすることである。社会にむけて男たちが開いている「目」は大きいようだが、仕事の視角の枠をとりこえることはむずかしい。それに比べると、くらしを守る家庭婦人は、その気になりさえすれば、無限に視角を拡げる可能性をもつ。政治、経済、社会問題も、すべてくらしを守ることが基点だからである。この可能性を大切にしたい。要は努力しようとする心がけの問題である。以上が結論に見る著者のまとめと女性への呼びかけである。

これはぜひ若い女性に読んでもらいたい書である。さらに中年以上の女性に読んでもらいたい。しかし、いちばん読んでもらいたいのは男たちである。自責の念をもって、女性にむけての「目」を開いてもらいたい。いわせてもらえば「人間」に目を見ひらいてもらいたい。女性のうちから、本書に刺戟されて、日本における女性の問題

状況を深く掘りさげる人が出てほしいものである。そうしたアピールをもつのが本書である。

緒方純雄（大学神学部教授）

同志社談叢 第四号

論文

アーモスト館五十年の歩み（仮題）

北垣宗治

悲劇の日本銀行総裁・深井英五

—金融政策の激動期を生きた同志社人—

同志社人—

同志社の近代建築（下）……………前 久夫

—遺構と資料……………山形政昭

資料

同志社常議員会録事

—自明治二十三年四月 至明治三十一年七月

組合教会臨時総会決議 議事録時抄・

懇談会記事（明治二十一年十一月

二十三〜二十八日、於大阪教会）

新島襄に関する文献ノート（其の三）

（昭和五十八年十二月発行予定・

頒価未定）